



はーとふるメッセージ2003



学年は、いずれも応募時のものです。

特選作品紹介 第 6 回

作文・中学生の部

心のバリアフリーな 社会を目指して



阪口朝香さん
(鳥居本中学校2年)

最近、よく『バリアフリー』という言葉を目にします。改めて私の周りを見回してみると、私が塾に行くときに利用する駅にエレベーターが新たに作られたり、以前通っていた小学校に身体障害者用のトイレが作られたりと、施設の面では、障害者や高齢者の人たちが生活しやすいようにバリアフリー化が進み、よりよい環境ができてくるように感じます。その一方で私たちの心の中はどつどつ

う。

以前の私は、駅にいる障害者や高齢者の人たちを見掛けても、何を手助けしていいのかからず、またどう話し掛けていいのかわからなくて、自分から進んでお手伝いをするのが、恥ずかしくてできませんでした。

一年前の夏、私は学校の総合的な学習で、市内の老人保健施設に福祉の体験をしに行きました。最初は、とまどいや恥ずかしさでいっぱいでしたが、施設のおじいさんやおばあさんの話を聞き、車いすを押してあげているうちに、とまどいや恥ずかしさが消え、体験を終えて帰るときにはおじいさんやおばあさんのお礼の言葉に素直になれていた自分を思い出します。私の家族は、お父さん、お母さんそして妹の4人家族です。おじいさんとおばあさんと日常生活をしていない私はこの体験まで、高齢になるとどんなことが

つらく、どんなふうにしたら喜んでもらえるのかわかりませんでした。昔と違って、核家族が多くなった日本では私のように、お年寄りの人とのように接していかかわからず、手をこまねている人がたくさんいるのではないかと思います。

それぞれの立場にある人のつらさや大変さは、その人といっしょに生活してはじめて本当に理解できるのかもしれない。障害者や高齢者、同和問題で苦しんでいる人々に進んで接し、体験し、同じつらさを感じる機会をできるだけたくさん持つことにより、初めて心と心の障壁がなくなり、本当の意味でのバリアフリーな社会ができるのではないだろうか。

選評
純な気持ちで社会の変化や自分の変容を見つめることから、自分の考えを整理し、思考を深め、さらに対象を広げ、今日求められている心のバリアフリーの実現のためには交流や共感を得れば、という仮説を提示し得る段階にまで及んでいる。このことを特有の用語を用いることなく、また、高ぶることなく述べていて、読みやすく、願いとするところをくみ取りやすい。

標語・一般の部

馬場栄子さん
(株バスターネ)

自信ある？

あなたの態度

子どもたちの前で

「はーとふるメッセージ2004」 作品募集中！

詳しくは、「広報ひこね」7月1日号をご覧いただくか、**困人権政策課 ☎22-1411 (内線352)** までお問い合わせください。